巻頭エッセイ　言葉と向き合う

美しい日本語を聞くということ

女優　中井貴恵

中井貴恵
なかいきえ

東京都生まれ。女優・エッセイスト。早稲田大学在学中、映画「女王蜂」でデビュー。その後、数々の映画やドラマに出演。1982年に日本アカデミー賞助演女優賞を受賞。エッセイや絵本の翻訳も手がけ、98年より、「大人と子どものための読みきかせの会」を立ち上げ、大型絵本と生の音楽をつけた独特の読みきかせを行っている。

「大人と子どものための読み聞かせの会」の活動を始めて早十五年がたった。幼稚園や小学校、病院などこの十五年の間におよそ九百か所以上のところを訪れ、手作りの大きな絵本と生の音楽と一緒に童話を朗読している。

俳優の仕事はしてきたが、声に出して物語を読むという、いわゆる「朗読」というものに真剣に取り組んだことはなかった。「音読」の延長線上にある「朗読」だ。台詞を覚え表情や体を使って表現する演技に比べたら、さほど難しい作業ではないだろうとたかをくくっていた。しかし、さまざまな作品を声に出して読めば読むほど朗読は奥深い作業であり、また文章が平明であればあるほど声に出して伝えることの難しさを実感している。

子どもたちがこの世に生まれ最初に触れる物語のそのほとんどは、大人の声を通して聞くものであろう。自分で文字を読み、物語を理解するいわゆる読書ができるようになるそのずっと前に、子どもたちは誰かの声を通して言葉というものを聞き、物語を知るのである。そう考えると絵本を真ん中に大人と子どもが過ごす時間は、とても貴重であり大切であることがわかる。

私たちの会が取り上げている作品の中に、森山京（みやこ）さんのきつねのこシリーズと呼ばれている童話集がある。おなじみの『きいろいばけつ』をはじめ『ぼくだけしってる』『つりばしゆらゆら』『たからものとんだ』『あのこにあえた』。どれもきつねの男の子こんすけ君を主人公とした作品である。私が会を立ち上げるきっかけになったのが、この中の『つりばしゆらゆら』という本に出会ったことだった。当時長女は五歳。その誕生日に知人から贈られた本がこの『つりばしゆらゆら』だった。

谷川にかかる一本の長いつりばし。このつりばしの向こうにまだ一度も会ったことのないきつねの女の子が住んでいると知ったこんすけは、その女の子にどうしても会ってみたいと思い、友達に内緒で一人でつりばしを渡る練習を始めるのである。雨の日も風の日も、毎日少しずつ歩みを進めるこんすけ。橋板のすきまから深い谷底をみて立ちすくんだり、雨に濡れた橋でしりもちをつきそうになったり、怖い思いを繰り返しながらも少しずつ橋を渡って行くこんすけ。このけなげな姿につい読み手である大人の私が「がんばれ」と後押しをする。「もう少しで渡れる……。だからがんばって」。しかし、物語の最後には思いがけない結末。こんすけは橋を渡りきることはできず、会いたい女の子にも会えないまま物語は幕を閉じるのである。

悲しいわけでもないのに、涙があふれ出た。「がんばったらできる」。それまで子どもに何度もそう言い聞かせて子育てをしてきた自分だった。でもよく考えれば自分だって、がんばってもできないことがたくさんあったじゃないか、と言われているようだった。全部できなくてもいい、がんばることに意味がある、がんばる姿にこそ人々は胸を打たれるのだ、と本は優しく私に諭した。

私の人生を変えたといっても過言ではない一冊の本との出会いだった。これを機にシリーズすべての童話を幾度も繰り返し読んだ。そのすべての作品に込められた温かいメッセージ、そして物語に流れる美しい日本語。私はすべての作品を私たちの読みきかせの会で取り上げ今まで何百回となく朗読をしてきた。

森山さんの童話には、声に出して読んだとき、実に心地良い一定のリズムがある。そしてもう一つ、森山さんの童話を繰り返し声に出し読んでいるうちに気がついた不思議なことがある。それは、口語体ではめったに使われることのない言葉が一冊の童話の中にたくさん出てくることだ。たとえば『あのこにあえた』（これは『つりばしゆらゆら』の続編ともいうべき作品でこの物語でこんすけはついにつりばしを渡りきり会いたかった女の子に会える）ではそういう言葉が実にふんだんに使われている。

・まるきばしのたもと
・つりばしのきわ
・あゆみをすすめる
・ゆくてをながめる
・ふっつりやめる
・かわのせおと
・ようようわたりおえる

日常の会話で現代の大人である私たちも使わないような、またこの言葉だけを取り上げて子どもに意味を尋ねたら、おそらく首をかしげるであろう言葉ばかりである。しかしそれは同時に、昔ながらの言葉だが日本語独特の語感や響きをもつ美しい言葉でもある。読み進められる童話の中でそんな言葉がすっと耳に入ってくれれば「つりばしのきわ」も「ふっつりやめる」もおそらく確実に、そして自然に、正しい意味を子どもたちは理解するのである。あえて子どもが意味を問わない限り説明もせず読み流す。そんな言葉の伝え方や教え方ができるのも朗読ならではの産物だろう。

二〇〇〇年に設定された「子ども読書年」を皮切りに、「読書」は各学校で大切な教育の一つと位置づけをされ、読書への取り組みも多様化している。しかし読書好きな子どもたちのかげで、読書嫌いな子どもたちが重い荷物を背負ったのも事実だ。私は読み聞かせという作業を通して読書嫌いな子どもたちの脳裏のどこかに、耳から聞いた美しい言葉や、温かい物語を残せたらと思っている。大きくなってからでもいい、昔聞いた言葉や物語を思い出し、いつかその本を手にとってくれたら、それが私たちの読み聞かせという作業の一つの完結であり、終着点なのかもしれないと思っている。